月明かりの野道

　父さん、今、この広大な宇宙のどの辺りを旅していますか。このごろ、夜空を見上げると、故郷の月夜のあの野道を思い出します。

　子供の頃、父さんが勤めていた工場の従業員浴場に行った帰り、必ず通った小学校裏の野原の小道。いつもは怖い暗闇の道も、月夜の晩は心が弾みました。

　特に秋には、冴え渡る月光の中で、白く浮き出たように見える道の両側一面は、の穂が青白く輝き揺れて、まるで幻想の世界でした。いつまでも漂っていたいとの思いから、遅れがちになる私の手を、黙って優しく握っていてくれたゴツゴツした大きな手。守られているんだな、と感じました。

　そんな私も父さんが亡くなった当時の年齢に近づきました。親譲りの寡黙な性格のゆえか、父さんと話を交わした記憶はあまりありません。でも、月明かりの野道での手のもりだけは、なぜか今でも覚えています。

応募時（大阪府57歳）鈴木睦美